

---

# MOON-4 夜叉 2 < 1 6 >

みづき海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 2 <16>

### 【Zコード】

Z9947M

### 【作者名】

みづき海斗

### 【あらすじ】

和人と朝子、そして秀と別れてから3カ月が過ぎていた。裕希は友人の惇と昼食をとっているが、惇は裕希の異変に気付いた - - -

MOONシリーズ第4弾『夜叉 2』第4話です。

#### 4・記憶・1(前書き)

「うわでらわすひにこのが、夜叉。。。

昼時、裕希は幼馴染で友人の惇と学校内にあるカフュ・テラスにいた。

真夏の日差しがガラス張りの天井から眩しく降り注ぐ。ただ一筋、白い雲が流れているだけである。

「でさ、裕希。結局」

フォークを置いて惇が正面の裕希に声をかけた。「この間の例のシード校がもう一つの高校に5点差で敗れてさ、俺たちベスト4位入りになつたんだ。」

「そう。」

裕希はブラックのコーヒーを飲みながら、

「良かつたじゃん。試合はいつ？」

「今度の日曜日が準決勝で、うまくいけば来週俺たち決勝だぜ。」

惇が嬉しそうに言つ。

そんな彼を裕希は目を細めて見つめているだけだった。

「どうかしたのか？ 裕希。」

その『遠い』眼差しに気付いた惇が彼に問いかける。

「別に何もしないよ。」

裕希は笑顔で首を振つた。「どうして。」

「どうして、つて……」

惇は少し首を傾げ、「お前さ、成城の家から通つようになつてから何か前のお前とは違つた。」

「え。」

裕希は目を丸くした。「別にいつもの通りだけど？ 惇。」

「んー。何か違うんだよなー、一人暮らし始めてバイトもやってとか言ってた3カ月前と比べて。」

「・・・・・」

もちろん裕希には心当たりもない。

いつも通り、市子と早坂に見守られ生活している。

「変わったかなー？」

裕希は、「実家に帰ったからじゃない？」

「そうかもしれないけど」

と、惇はそこで一呼吸置き、「ガキの時からお前知ってるけど、どっちかっていうと盛り上げる方のタイプじゃん？」

「そうだつたけ？」

「うん、そう。いつも周囲に気を使つてさ。だけど、今のお前は『誰か』を『見守る』立場つて感じ。」

「うーん・・・・・・」

裕希は左手で長めの前髪をかき上げた。

その姿をじっと惇は見つめ、

「そんな癖、なかつた。」

「はい？」

再び目を丸くする裕希。そんな彼に対し、

「困つたり悩んだりした時、そんな髪に手をやる癖なかつたし、それに」

と、裕希の前に並べられた昼食を見つめ、

「そんなに残すなんてとても10年近く寮生活してた奴だとは思えないぜ。」「こんど」「ずっとそつ。パンをかじるか、コーヒーだけか。」

「だって・・・そんなお腹空かないし。」

「でも、前はちゃんと食べてた。いくら部活休んでるからといって、

「そんな食べないのはおかしい。」

「・・・・・・かな。」

裕希はコーヒーを一口飲んだ。

それを見つめ惇が細くする。

「裕希。お前コーヒー、ブラックじゃ飲めなかつただろ？・必ず！」

ルク入れてた。」

「・・・・・」

言われてみると・・・成城の実家に帰つてから一度もコーヒーや紅茶にミルクを入れていない。

「だから言つたる。」

惇が裕希の顔を覗き込み、「なんかお前は『裕希』だけど俺の知つてる『裕希』じゃないって。」

真剣な惇の眼差し。

少し困り、また髪に手をやる。

そこで、ふと気付いた。

「・・・・・やっぱ変?」

「変。」

惇は断言した。

もしも、それが『本当』だとしたら・・・・・・  
裕希の心の中にある『希望』が生まれた。

(コーヒーはいつもブラック。困った時とか前髪をかき上げる癖。)

知つてゐる。

それは、和人。

「ねえ、惇!」

裕希は中腰になり、白い丸いテーブルに身を乗り出した。

「他に何か変わつたトコない?俺。」

「ある。」

惇は頷き、『それ』を指摘する。

「少なくともお前は『左利き』じゃないし、そんな大人びていたりしないこと。」

喧騒が。

昼休みの喧騒が一層増す。

「ありがとう、惇!」

裕希は席を立つと、素早く出口へ走つて行つた。

「おいつ！ 裕希！」

背後から惇の声が飛んでくる。

「俺またさ」

裕希はちょっとだけ振り返り早口で言つた。

「学校休むから。先生に行つておいて！」

「だから・・・おい、裕希！！」

生徒たちの間をすり抜けて校外へと向かう裕希に、もう彼の声は届かなかつた。

（俺の中に和人がいる！）

確信だつた。

少なくとも和人と『記憶』を共有している。

だから、あの金色にビリジアン・ブルーを混ぜた色の瞳を持つ者が誰か判る。

それは、九桜。

（九桜がきっと何処かにいるはずだ。）

裕希は校庭を走りながら思つた。

（間違いなければ・・・俺が和人と『記憶』を共有しているのだとしたら、俺は桜たちを倒せる。桜たちは九桜の復活を握る『何か』を俺か和人の『記憶』の中に見つけたんだ。）

樹木の葉が激しく揺れる。

裕希は学校を後にした。

そんな彼の姿を見降ろし、

「あーあ、気付いちゃつたみたい。」

樹の上から幼い少女の声が聞こえて來た。

「私、秀が欲しかつたのに、あの子まで欲しくなっちゃつた。だって九桜の『復活』の鍵を握つてる子なんだもの。」

声の主は桜だった。

「追いかけようか、お嬢。」

傍らの神がそう声をかける。

「神は私と一緒にいて。」

にこっと笑つて人差し指を口元に当てる。

「あの子の事は秀に任せせるわ。その方が面白いもの。」

ひらり・・・・・と桜は樹から舞い降り、

「まさか『帝王』を倒した『帝王』が、『復活』の鍵を握ってる

なんてね。」

一人、微笑む。

瞳が - - - 金色とビリジアン・ブルーを混ぜた闇色の瞳が夏の日  
射しに煌めいた。

#### 4・記憶・1（後書き）

マークのみならず、あつがとうござります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9947m/>

---

MOON-4 夜叉 2 < 1 6 >

2010年10月21日21時33分発行